

昔話の主人公から国家の象徴へ

——「桃太郎パラダイム」の形成——

加 原 奈穂子

1. はじめに

桃太郎は、国内外で広く知られる日本の昔話であるだけでなく、富士山、桜、日の丸などと同様に、日本及び日本人を表わす代表的なメタファーの一つとして、しばしば用いられてきた。しかし、このような桃太郎の象徴性は、近代学校教育制度が整えられ、桃太郎が国語教材に掲載されるようになった、明治中期以降に形成されたものである。その象徴性のあり方は多義的であると同時に、日清戦争から太平洋戦争終結に至る国家主義、軍国主義が高まりを見せた時代と、戦後から現在に至る民主主義の時代との間で、大きな変化が見られる。

アメリカの歴史学者、ジョン・W・ダワーは、太平洋戦争における人種偏見の問題を分析した著書“*War without Mercy: Race and Power in the Pacific War*” (1986) の中で、太平洋戦争時に日米双方で見られた自己と他者に対する文化的ステレオタイプを分析し、日本側の認識枠組みを特徴づけて「桃太郎パラダイム (Momotarō paradigm)」と呼んでいる。図1.は、ダワーがその最も象徴的な例として挙げている大人向けの雑誌『漫画』の、1942(昭和17)年2月号に掲載された一コマ漫画である。そこには、桃太郎が三匹の家来を連れて、鬼のローズベルト、チャーチルを追い払う様子が描かれている。犬は「東亜共栄圏樹立」の幟を掲げ、桃太郎の陣羽織の折襟には「世界一」と書かれている。言うまでもなく、ここでは桃太郎の登場人物たちはメタファーとして用いられており、日本が他のアジアの国々を主導し、白人の帝国主義者を追い出すという構図が示されている。

戦時期の日本で見られたプロパガンダの多くで、歴史や物語に登場する英雄やスローガンが、国民が共有すべき規範を示すための格好の素材として用いられた。ダワーは、特に1920～30年代の日本で強調されたのが、ダイナミックな「新日本」というイメージであったことを指摘している。桃太郎は、若さ、活力、積極性、正義、親孝行などの徳目を備えた存在として、新しい日本と日本人の大衆的なシンボルとされた。一方、鬼は敵国と読み替えられ、老いた醜

(Web上では非公開とさせていただきます)

図1. 『漫画』(1942年2月号)に掲載された一コマ漫画 (Dower 1986 : 198)。

い姿で描かれた (Dower 1986 : 256-257)。

幕末の開港から第二次世界大戦敗戦に至るまでに、日本は三度の対外戦争を繰り返した。鬼を退治して宝を持ち帰る桃太郎の話は、そうした時代のイデオロギーに適合したために、戦意高揚のための宣伝に度々利用された。ダワーの言う桃太郎パラダイムの形成は日清戦争時にはすでに見られ、その痕跡は、教科書や絵本から唱歌や演劇、映画などに至る、実に多様なメディアにおいて辿ることができる。また、こうした問題は、現在の日本国内のみに留まらず、当時日本の植民地支配下、占領下にあった地域——台湾、中国、朝鮮、南洋群島、東南アジアなど——に関しても指摘できる。

本来は単なる昔話の一つに過ぎなかった桃太郎が、如何にして国家や国民を象徴する存在となり、ひいては軍国主義の宣伝にまで利用されることとなったのか。ダワーは、桃太郎嚙自体については、1941 (昭和16) 年2月から1945 (昭和45) 年9月までの間、文部省発行の小学校国語教科書に掲載されていたこと、口頭伝承には多様な変形があることなどを指摘している (Dower 1986 : 252)。しかし、桃太郎パラダイムが成立する前提として、少なくとも、一定の物語内容、それを記述する言語、さらには視覚イメージのステレオタイプが、国民の間で広く共有されることが不可欠であったと考えられる。

文献上の桃太郎嚙については、滑川道夫『桃太郎像の変容』(1981)、鳥越信『桃太郎の運命』(1983)らの労作を始めとして、主に児童文学及び近世文学研究の中で、江戸期以降の作品を対象とした物語内容や作品の成立背景などに関する研究が見られる。口頭伝承に関しては、明治末期より民俗学の分野で聞き取り調査が進められ、全国各地で語り継がれた桃太郎嚙の豊かな地域的多様性が明らかにされてきた。一方、図像に関する研究は限定的だが、日本美術史や近世文学及び児童文学研究の分野で幾つかの重要な指摘が散見される。ただ、これらの研究は、扱う時代や資料、テーマなどにおいて、個々の分野の枠内で行われたものが多く、桃太郎パラダイムが形成されてゆく過程での諸要素の相互関連が見えにくい。本稿では、先行研究の知見を踏まえたうえで、本来は豊かな多様性を持つ桃太郎嚙が国家の物語として再創造されてゆく過程について、教科書、絵本、メディア・イベント、唱歌、映画などに至る、多様なメディアによる表象を扱いながら考察を進めたい。

2. 桃太郎嚙の多様性と「標準型」

桃太郎嚙の特徴の一つは、多岐にわたるメディアに登場してきたことであり、それぞれの物語内容も多様性に富んでいる。伝承メディアの違いに注目すれば、桃太郎嚙は、口頭伝承 (oral tradition) と書承という二つの流れに分類できる。口頭伝承とは、口伝えによって語り継がれる一定の内容や語り方の形式を持ったことば——たとえば、昔話や伝説、ことわざなど——であり、本来、語りの場や聞き手に対応して語られる一回限りのパフォーマンスである。これに対し、日本語で用いられる書承という表現は、一般的には、紙などの平面上に、

文字で、あるいは文字と図像で記されたものによる伝承を指して用いられる。これらは単に伝承メディアや情報の流れのあり方が異なるだけでなく、主に前者は民俗学、後者は文学研究における研究対象とされてきた。

桃太郎噺が口頭伝承として成立したのは、その知名度に反して意外に遅く、室町末期から江戸初期、紙面に文字や絵で表現されるようになるのは江戸初期と推定される。現存が確認できる最古の文献は、1723(享保8)年に江戸で刊行された赤小本『もゝ太郎』(画作者未詳)である。江戸期の絵巻に描かれているのは標準的な桃太郎噺であるが、草双紙類では、特に黄表紙になると、標準型に加えて大人向けの翻案作品も多く見られる。明治期以降に出版された教科書、絵本、雑誌の類に登場する桃太郎噺は、標準型が主流を占めるが、一方で物語の設定や解釈にかなり手が加えられた作品も少なくない。さらに、口頭伝承の桃太郎噺を見ると、内容も語り口も地域的な多様性に富んでいる。例えば、『日本昔話通観』(全29巻)には、東北・北陸地方では桃太郎が桃にではなく箱に入って流れてくるとするもの、中国・四国地方では桃太郎が横着者で鬼退治に行かず最後に大力を發揮するものなどを始め、物語内容が標準型とはかなり異なる例が数多く収められている。

このように口伝えにおいても文献においても、「桃太郎」を表題に用いる物語の内容は余りにも多様であり、中には桃太郎という人物名だけが同じで、物語内容は全く異なる創作もある。それらを大別すると、①現在、一般に普及している標準型、②物語の筋立てや登場人物が一部異なるもの、③他の物語と組み合わせられたもの、④桃太郎噺を元にした翻案、④桃太郎の名前だけを用いた創作、となる。本稿では、混乱を避けるために桃太郎噺の「標準型」という語を用い、近代に教科書に掲載された筋立て——①桃からの誕生、②桃太郎の名付けと成長、③鬼征伐への出立、④犬・猿・雉をお供にする、⑤鬼が島での鬼との戦闘、⑥鬼が宝物を差し出す、⑦宝物を携えて故郷へ凱旋——を持つものを指すこととする。

3. 桃太郎噺の「国民童話」化——教科書への掲載

学校教育の教材としては、表1.1に見るように、桃太郎は、1887(明治20)年に文部省編纂の『尋常小学読本(巻一)』に初めて登場して以来、第二次世界大戦の終結に至るまで、小学校の国語教科書に数多く掲載された。また、唱歌、図画などの教科でも用いられている。学校教材への採用がもたらした最大の変化は、数ある昔話の一つに過ぎなかった桃太郎を、いわば「国民童話」の位置にまで押し上げたことである。

国民童話は、国語や国歌、国旗などと同様に、近代日本の国民国家形成における重要な装置の一つでもあった。国民童話の定義については、国文学者の島津久基が『日本国民童話十二講』(1944)の中で、「一地方だけの特殊な民間口碑でなく、国民一般に知られ語られ親しまれてゐる童話で、且文学化されて(文字による童話の形となり)一層国民全体のものとなつてゐるもの」としている(島津 1944: 9)¹。本稿では、この定義に、物語を記述する言

語が国家の言語としての標準語であり、主要場面や主要登場人物のステレオタイプ化された視覚イメージが広く共有されていることを補足しておきたい。

1872（明治5）年、日本最初の近代学校制度に関する基本法令である「学制」が發布され、初等教育の義務就学の方策が採られた。しかし、「小学教則」には標準とすべき教科書が指示されただけで、実際には欧米の翻訳教科書が多く用いられた。明治10年代に入ると、国家主義に基づく国民教育の確立を目的として、教科書に国家統制が加えられ始め、小学校の教科書は各府県が一定の書式により文部省に届け出ることとされた。1886（明治19）年には、新たに「小学校令」が發布され、教科書認可制度から検定制度に変えられた。それを機に、民間検定教科書に対する規範を示すために、文部省は教科書の編纂に取り組んだ（文部省1972）。その中の一冊として刊行された『尋常小学読本（巻一）』（1887）において、桃太郎は初めて学校教材に採用された。

明治20年代は、1894～95（明治27～8）年の日清戦争による国家意識の高揚を背景として、近代国家を支える「想像の共同体」としての「国民」の創出が図られた時代でもあった。その重要な礎となる「国語」という概念が、国家の統一を図るために国民の間で共有されるべき日本語の規範を指して用いられ始めたのも、明治20年代以降のことである。明治初期には、話しことばと書きことばとの隔たりは大きく、江戸時代に武士階級や知識人の間で用いられた漢文や漢文訓読文は、国民の間で広く使用されるには適さなかった。そうした状況に対して、国字改良、漢字節減、言文一致、仮名遣い、標準語の確立などをめぐる議論が盛んになった時期でもあり、国語教科書にもその反映が見られる。

1887（明治20）年に文部省編纂の教科書が刊行された後にも、民間から多数の国語教科書が編纂されており、桃太郎を素材として取り上げるものは多い（表1.）。しかし、1902（明治35）年、民間検定教科書採用をめぐる汚職である「教科書疑獄事件」が起こったのを機に、翌年4月には小学校令の改正に伴い、「小学校ノ教科用図書ハ文部省ニ於テ著作権ヲ有スルモノタルヘシ」とされ、小学校教科書の国定化が一気に進められた。以後、国定国語教科書は四度の改訂を重ねたが、桃太郎は、第1期を除いて、第2～5期までのすべての国語教科書で、一年生の前期に学習する「巻一」に採用されている。表2.は、『尋常小学読本（巻一）』

（1887）及び第2～4期の小学校の国定国語教科書における桃太郎の位置づけと描かれ方を、後に桃太郎と軍国主義の関係をめぐって議論に上がった要素に注目して整理したものである。以下では、枚数の制約のため、民間教科書に関する考察は別稿に譲り、より影響力の大きかった国定国語教科書の変容に焦点を絞る。

『尋常小学読本（巻一）』（1887）では、第二六課から二八課で、3枚の挿絵と共に桃太郎噺の標準型の全体が掲載されている。桃太郎の誕生については、江戸期の草双紙類では桃を食べた爺婆が若返って桃太郎を産む「回春型」が多く、明治期以降の文献では桃から生まれる「果生型」が一般的である。口頭伝承では果生型が多い²。教科書ではすべて果生型が採用さ

れているが、これは児童に対する教育上の配慮から性的要素を除いたためとされる³。また、鬼の悪行を強調するなどの鬼退治の理由付けはなく、戦いに敗れた鬼が自発的に宝物を差し出す形が採られており、犬・猿・雉に宝物を分配している。文体については、冒頭の「緒言」の巻一に関する部分に、「一地方ノ方言ト、鄙野ニ渉レルモノトヲ除キ、談話体ノ言辞ヲ以テ之ヲ記シタリ」とあるように、難解な文語体を避け、標準語の言文一致体の使用が試みられている。以後の国定国語教科書に掲載された桃太郎も、すべて「標準型」であり、会話文にも地の文にも標準語の言文一致体が使用されている。

第1期の『尋常小学読本』(1904)では、漢字節減、仮名字体の統一、表音的棒引き仮名遣いの採用、従来の「デアリマス」に変えて、敬体の「デス」、常体の「ダ」を使用するなどの進歩的な方針が採られた。その一方で、方言の発音矯正や語法の練習に重点が置かれ、桃太郎などの文学的な教材は除かれた。1907(明治40)年に、尋常小学校の修業年限が4年から6年に延長され、それに併せて大幅に改正された第2期の『尋常小学読本(巻一)』(1910)で、桃太郎は再び教材として採用されたが、第一巻の中途にわずか76文字が掲載されているだけで、話を味わうというよりは、文字や表記法等の学習素材としての扱いである。なお、国定教科書のため執筆者名は記載されていないが、1906(明治39)年2月から巖谷小波が文部省図書課の嘱託として教材の選定補修や執筆に当たっており、本書の桃太郎が小波の筆によるものである可能性は高い(唐沢 1992:402)。

第3期の『国語(巻一)』以降、桃太郎は、教科書構成のうえでは常に第一巻の巻末に掲げられ、挿絵の数も大幅に増加している。加えて、物語の解釈に興味深い変化が見られる。『国語教育』第3巻第9号(1917)に掲載された、学校教育の場で「桃太郎を如何に取扱ふべきか」をテーマとする懸賞論文には、興味深い指摘が多く見られる。例えば、二等当選の秋田市の尋常小学校訓導・丸山修一郎は、数年前までは「国民的な(伝統的な童話といふ意の)童話で趣味教材」とする解説が大部分で、「興国的の意気を振興せしむべき教材であるなど高潮したのは一つも見当らなかつた」が、「現在桃太郎の教材に対しては何れも進取的興国的の教材であると唱へられて居る」(丸山 1917:131)としている。また、一等当選の大阪府池田師範学校訓導・木下米松は、桃太郎嚙に含まれる教訓を、全体的大教訓(進取・海外発展・尚武)と部分的教訓(父母の恩・勇気・義侠・生物愛護・孝行)に手際よく分類している(木下 1917:127)。

滑川(1981:442-452)が指摘するように、桃太郎の解釈が変化する中で、教材としての是非をめぐる議論も起こった。その初期の例が、1925(大正15)年1月発行の『文芸春秋』(新年特別号)で、作家の山本有三が自由主義の立場から第3期の『国語(巻一)』を批判した論考に見られる。山本有三は考察の最後に桃太郎を取り上げ、舞台設定が都会の子どもには理解しにくいことや、明確な理由もなく鬼を征伐する理不尽さを挙げて、「この思想は他国人は鬼と思えと言うも同じで、今どき教科書に入れるべき話ではない」と断じている(山本

表1. 学校教科書への「桃太郎」掲載（*本表の作成に当たっては、清川（1981）、堀内・井上（1958）、宮脇ほか（2009）を参照した。）

科目名	発行年月日	編・著者名	題名・書名	発行者
国語	1887（明治20）年4月29日	文部省編集局	『文部省教科用書』	大日本図書
国語	1890（明治23）年11月28日	山本放卷	『武士忠孝教育桃太郎御歌』（和本）	松本平吉
国語	1892（明治25）年7月11日	山藤南三郎	『第二十二課桃太郎』、第六十二課桃太郎『小国語文読本 巻之四』（和本、全8冊）	文学社
国語	1892（明治25）年9月20日	学海指針社/編集	『第二十七課桃太郎』、第二十八課桃太郎『帝國読本 巻之四』（和本、全8冊）	集英堂本店
国語	1893（明治26）年10月26日	学海院/編	『ちよ、あまはて、しほをかり、ぼ、かははて、せんたす』『帝國院初等教科書 巻四』（和本、全6冊）	学海院
国語	1894（明治27）年11月16日	今泉定介・須永和三郎/編	『新下坂町明治27年12月22日』	普及社
国語	1895（明治28）年10月	栗沼松軒/述	『古文一致桃太郎の語（的「文字文章改良論」）』（和本）	東京臨山房
国語	1895（明治28）年11月8日	学海指針社/編集	『第十九課もたらう、第二十二課まへのつゞき』『帝國新読本 巻之三』（和本、全8冊）	集英堂本店
国語	1896（明治29）年6月6日	東京女子高等師範学校	『若狭鹿太郎（一）』、第五課桃太郎（二）』『尋常小国語読本 巻之三』（和本、全8冊）	東京女子高等師範学校
国語	1896（明治29）年9月10日	香取春樹/編	『第二十二課桃太郎』、第二十三課桃太郎『帝國院初等教科書 巻四』（和本、全8冊）	普及社
国語	1896（明治29）年10月1日	金港堂書籍/編集	『第二十二課桃太郎のはなし』、『第二十三課桃太郎』、『尋常小国語読本 巻四』（和本、全8冊）	金港堂書籍
国語	1896（明治29）年11月24日	大久渡	『も、たら、も、たらう、つゞき』『国民読本尋常小国語校用 巻二』（和本、全8冊）	大日本図書
国語	1897（明治30）年3月2日	文学社編集所/編集	『第二十七課桃太郎（一）』、第二十八課桃太郎（二）』『尋常小国語読本 巻之三』（和本、全8冊）	文学社
国語	1897（明治30）年10月11日	学海指針社/編	『第四課桃太郎（一）』、第五課桃太郎（二）、第六課桃太郎（三）』『新編尋常読本 巻二』（和本、全8冊）	普及社
国語	1897（明治30）年11月4日	普及舎編集所/編	『ムカシバシ』『国民読本 尋常小国語校用 巻二』（和本、全8冊）	普及社
国語	1897（明治30）年11月14日	文学社編集所/編	『第二十七課桃太郎（一）』、第二十八課桃太郎（二）』『尋常小国語読本 巻之三』（和本、全8冊）	文学社
国語	1898（明治31）年6月20日	西澤之助/編	『第四課桃太郎（一）』、第五課桃太郎（二）、第六課桃太郎（三）』『東久世通読本 巻四』（和本、全8冊）	普及社
国語	1898（明治31）年10月8日	教育研究所/編	『桃太郎』（修身童話）第一巻、上田万年・谷本富・湯木武比古校閲	開発社
国語	1898（明治31）年10月17日	樋口勤治郎/著	『第二十七課桃太郎（一）』、第二十八課桃太郎（二）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	開発社
国語	1899（明治32）年9月2日	学海指針社/編	『第二十七課桃太郎（一）』、第二十八課桃太郎（二）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	開発社
国語	1899（明治32）年10月22日	西澤之助/編	『第二十七課桃太郎のはなし（一）』、第二十八課桃太郎のはなし（二）、第二十九課桃太郎のはなし（三）』『新編尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	開発社
国語	1899（明治32）年10月28日	育英舎/編集	『第二十二課桃太郎のはなし（一）』、第二十三課桃太郎のはなし（二）、第二十四課桃太郎のはなし（三）』『新編尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	開発社
国語	1899（明治32）年12月25日	坪内雄蔵	『第二十九課もたらう、第三十課もたらう、第三十一課もたらう』『日本国語読本 巻三』（和本、全8冊）	普及社
国語	1900（明治33）年9月6日	普及舎編集所/編	『第十五課太郎』、第十六課太郎『小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	集英堂
国語	1900（明治33）年9月13日	学海指針社/編	『第二十九課もたらう、第三十課もたらう、第三十一課もたらう』『新編尋常小国語校用 巻三』（和本、全8冊）	集英堂
国語	1900（明治33）年9月17日	坪内雄蔵	『第二十九課もたらう、第三十課もたらう、第三十一課もたらう』『新編尋常小国語校用 巻三』（和本、全8冊）	集英堂
国語	1900（明治33）年9月30日	金港堂書籍/編集	『第二十九課もたらう、第三十課もたらう、第三十一課もたらう』『新編尋常小国語校用 巻三』（和本、全8冊）	金港堂書籍
国語	1900（明治33）年10月13日	育英舎編集所/編集	『第二十九課桃太郎のはなし（一）』、第三十課桃太郎のはなし（二）、第三十一課桃太郎のはなし（三）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	育英舎
国語	1900（明治33）年11月11日	文学社編集所/編集	『第二十九課桃太郎のはなし（一）』、第三十課桃太郎のはなし（二）、第三十一課桃太郎のはなし（三）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	文学社
国語	1901（明治34）年1月10日	大日本図書	『第二十九課桃太郎のはなし（一）』、第三十課桃太郎のはなし（二）、第三十一課桃太郎のはなし（三）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	大日本図書
国語	1901（明治34）年6月10日	育英舎編集所/編集	『第二十九課桃太郎のはなし（一）』、第三十課桃太郎のはなし（二）、第三十一課桃太郎のはなし（三）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	育英舎
国語	1901（明治34）年6月13日	樋口勤治郎、野田謙三郎/合著	『桃太郎御歌 巻一』（3ウ・13オ・14オ）（和本、全16冊）	金港堂書籍
国語	1901（明治34）年6月28日	小山左文二・武島又次郎/合著	『桃太郎御歌 巻一』（3ウ・13オ・14オ）（和本、全16冊）	普及社
国語	1901（明治34）年6月28日	小山左文二・武島又次郎/合著	『桃太郎御歌 巻一』（3ウ・13オ・14オ）（和本、全16冊）	普及社
国語	1901（明治34）年7月12日	文学社編集所/編集	『第二十九課桃太郎のはなし（一）』、第三十課桃太郎のはなし（二）、第三十一課桃太郎のはなし（三）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	文学社
国語	1901（明治34）年7月12日	文学社編集所/編集	『第二十九課桃太郎のはなし（一）』、第三十課桃太郎のはなし（二）、第三十一課桃太郎のはなし（三）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	文学社
国語	1901（明治34）年9月23日	小山左文二・加納友市/合著	『第二十九課桃太郎のはなし（一）』、第三十課桃太郎のはなし（二）、第三十一課桃太郎のはなし（三）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	普及社
国語	1901（明治34）年11月3日	高知県教育会/編集	『第二十九課桃太郎のはなし（一）』、第三十課桃太郎のはなし（二）、第三十一課桃太郎のはなし（三）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	高知県教育会
国語	1902（明治35）年8月31日	文学社編集所/編	『第二十九課桃太郎のはなし（一）』、第三十課桃太郎のはなし（二）、第三十一課桃太郎のはなし（三）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	文学社
国語	1902（明治35）年8月31日	文学社編集所/編	『第二十九課桃太郎のはなし（一）』、第三十課桃太郎のはなし（二）、第三十一課桃太郎のはなし（三）』『尋常小国語読本 巻三』（和本、全8冊）	文学社
国語	1910（明治43）年2月28日	文部省/編	『オオサキヤマヤマシメツカリニ……』『尋常小国語読本 巻一』（黒読本、全12巻、修正大正7年2月5日）	文部省
国語	1910（明治43）年12月3日	広島県師範学校/編集	『桃太郎』『国語小国語読本 巻一』（自読本、全12巻）	広島県師範学校
国語	1918（大正7）年1月31日	文部省	『桃太郎』『尋常小国語読本 巻一』（自読本、全12巻）	文部省
国語	1933（昭和8）年1月31日	文部省	『桃太郎』『尋常小国語読本 巻一』（自読本、全12巻）	文部省
国語	1941（昭和16）年3月15日	文部省	『桃太郎』『尋常小国語読本 巻一』（自読本、全12巻）	文部省
国語	1941（昭和16）年3月31日	文部省	『桃太郎』『尋常小国語読本 巻一』（自読本、全12巻）	文部省
国語	1941（昭和16）年3月31日	文部省	『桃太郎』『尋常小国語読本 巻一』（自読本、全12巻）	文部省
唱歌	1905（明治38）年6月18日	田辺友三郎/作詞、納所秀次郎/作曲	『もたらう』『教科書用幼年唱歌 初ノ上』（納所秀次郎・田村虎藏共編、全10冊）	十字屋東洋店
唱歌	1911（明治44）年5月8日	蔵谷小波/作	『九龍太郎』『唱歌小国語読本 巻一』（佐々木片三郎・納所秀次郎・田村虎藏共編）	国定教科書共同販売所
唱歌	1914（大正3）年4月10日	岡野貞一/作曲	『七龍太郎』『唱歌小国語読本 巻一』（佐々木片三郎・納所秀次郎・田村虎藏共編）	文部省
唱歌	1932（昭和7）年3月30日	文部省	『三龍太郎』『唱歌小国語読本 巻一』（佐々木片三郎・納所秀次郎・田村虎藏共編）	文部省
唱歌	1932（昭和7）年5月28日	文部省	『三龍太郎』『唱歌小国語読本 巻一』（佐々木片三郎・納所秀次郎・田村虎藏共編）	文部省
唱歌	1941（昭和16）年2月27日	文部省	『桃太郎』『唱歌小国語読本 巻一』（佐々木片三郎・納所秀次郎・田村虎藏共編）	文部省
図画	1941（昭和16）年2月18日	文部省	『桃太郎』『唱歌小国語読本 巻一』（佐々木片三郎・納所秀次郎・田村虎藏共編）	文部省

表1. (続き) 植民地・占領地の学校教科書への「桃太郎」掲載

時期・科目名	発行年月日	編・著者名	題名・書名	発行者
台湾1期 (国語)	1912 (明治45) 年6月16日	台湾総督府	「ももたろう」(第3~5課)『台湾教科用書国民読本 巻五』(3学年)	台湾総督府
台湾3期 (国語)	1923 (大正12) 年3月30日	台湾総督府	「ももたろう」(一)~(三)『台湾公学校用国語読本 第一種』(2学年)	台湾総督府
台湾4期 (国語)	1928 (昭和13) 年2月10日	台湾総督府	「モモタラウ」(第3課)『台湾公学校用国語読本 第一種』(2学年)	台湾総督府
台湾5期 (国語)	1942 (昭和17) 年3月15日	台湾総督府	「モモタラウ」(第15課)『こくご』(2学年)	台湾総督府
台湾1期 (国語)	1924 (昭和9) 年	台湾総督府	「モモタラウ」(第4課)『公学校唱歌 第一学年』	台湾総督府
台湾2期 (国語)	1942 (昭和17) 年	台湾総督府	「モモタラウ」(第4課)『うたのほん 下』(2学年)	台湾総督府
朝鮮1期 (国語)	1913 (大正2) 年1月15日	朝鮮総督府	「モモタラウ」(第2課)『新編唱歌集 全』	朝鮮総督府
朝鮮1期 (国語)	1914 (大正3) 年	朝鮮総督府	「桃太郎」(第20課)『普通学校唱歌 第一学年』	朝鮮総督府
朝鮮1期 (国語)	1920 (大正9) 年	朝鮮総督府	「モモタラウ」(第12課)『初等唱歌 第一学年』	朝鮮総督府
朝鮮3期 (国語)	1939 (昭和14) 年	朝鮮総督府	「モモタラウ」(第27課)『モリスンヤウ エルホン』(1学年上)	朝鮮総督府
朝鮮4期 (国語)	1942 (昭和17) 年	朝鮮総督府	「モモタラウ」(第10課)『ワタノホン』(1学年上)	朝鮮総督府
朝鮮5期 (国語)	1942 (昭和17) 年	朝鮮総督府	「モモタラウ」(第28~30課)『日本語読本 巻一』(奉天外国語学校)	奉天外国語学校
朝鮮朝鮮館 (日本語)	1917 (大正6) 年3月31日	朝鮮館	「モモタラウ」(第30課)『国語読本 巻一』	南洋庁
南洋朝鮮館 (日本語)	1925 (大正14) 年	南洋庁	「モモタラウ」(第30課)『国語読本 巻一』	南洋庁
南洋朝鮮館 (日本語)	1937 (昭和12) 年	南洋庁	「モモタラウ」(第11課)『ニッポン』	南洋庁
南洋朝鮮館 (日本語)	1944 (昭和19) 年4月1日	南洋朝鮮館	「ももたろう」(一)~(三)『第11~13課』『にっぽんごくほん 二』	南洋朝鮮館
ヒルマア(日本語)	1944 (昭和19) 年2月1日	華僑正典		ヒルマア(華僑正典)

表2. 国定教科書等に見る「桃太郎」の比較

時期	書名、巻数、発行年	全頁数	掲載頁数	挿絵数	挿絵頁数	挿絵の理由	泰日子(形容、与える個数)	宝物の入手	宝物の分配	旗	ハチマキ	羽織	扇
国定2期	尋常小学読本 一、明治20 (1887)	92	12	3	なし	鬼征伐の理由	泰日子(形容、一つ)	降参して差し出す	あり	なし	なし	桃の実と葉	なし
国定3期	尋常小学読本 巻一、明治43 (1910)	55	3	2	なし		なし	なし	なし	なし	なし	なし	桃の実と葉
国定4期	尋常小学国語読本 巻一、大正7 (1918)	54	11	10	なし		ニッポン一、一つ	降参して差し出す	なし	なし	なし	桃の実と葉	日の丸
国定4期	小学国語読本尋常科用 巻一、昭和8 (1933)	78	22	10	なし		ニッポン一、一つ	罪を詫び助けを乞い差し出す	なし	なし	なし	桃の実と葉	日の丸
国定5期	ヨミカタ 一、昭和16 (1941)	90	17	11	なし		日本一、一つ	罪を詫び助けを乞い差し出す	なし	なし	なし	桃の実と葉	桃の実と葉

*国定2期では、桃太郎はお爺さんお婆さんが仕事に出る冒頭に出る場面と、宝を積んで帰郷する最後の場面しか掲載されていないため、その他の場面に關する部分は「一」としてている。

1977：288-293)。その指摘から約4年後の1929（昭和4）年2月1日、東京日日新聞（朝刊）が、「読本から削られる猿蟹合戦と桃太郎」という題目の記事を掲載した。その内容は、桃太郎は軍国主義の宣伝であり、猿蟹合戦は純真な児童に復讐を教えるという批判があることについて触れた上で、同様の意見が編纂委員会で見られ、まず文部省編纂の盲学校用教科書から「猿蟹合戦」を削除する決定がなされたと報じたものである⁴。日本童話協会の機関誌『童話研究』では、こうした文部省の決定に批判的な意見が大勢を占めている。例えば、主宰者の蘆谷蘆村は、桃太郎の鬼征伐は人道の蹂躪者に対する義憤によるものであり、義憤の精神が日本の国民の間から無くなれば、太平洋の地図が如何に変化することか、と論じている（蘆谷 1929：2-5）。井田秀明は、利害で動く欧米列強国とは違い、日本は正義のために戦う国であるとし、日本精神を養うものとして桃太郎を擁護する。その上で、日本が世界の精神的支配者となることで世界王化がなされると述べ、桃太郎の鬼退治を「夷狄王化運動」としている（井田 1929：47-50）。これらの見解からも、当時、桃太郎をめぐり解釈が如何に変化していたかが窺える。

こうした議論を踏まえて、第4期の『小学国語読本（尋常科巻一）』（1933）では、「モウ、ケッシテ人ヲクルシメタリ、モノヲトツタリイタシマセン。イノチ ダケ ハ、オタスケ クダサイ」と鬼が言って自発的に宝物を差し出し、「モモトラウ ハ オニ ヲ ユルシテ ヤリマシタ」とする形が採られている。『小学国語読本総合研究 巻一（第五冊）』（1938）の教材解説では、鬼のことは「モモトラウの拳が膺懲の軍であり、正義の師であることは、この一言によつて明らかにせられてゐる」とし、鬼を許すことで「モモトラウの寛大な徳と偉大な自信が表示せられてゐる」（西尾 1938：252）と説明している。

1941（昭和16）年の国民学校成立に併せて改訂された第5期の『ヨミカタ（一）』（1941）は、軍部の圧力下で物資不足を押して作成されたもので、超国家主義、軍国主義の性格が強い⁵。桃太郎は巻末の17頁を占めており、文面は第4期のものとほぼ同じだが、挿絵は全面的に改められている。特に、桃太郎の扇の模様が日の丸から桃の実と葉の印に変えられた一方で、図5.のように、最後の場面で、宝車を引いて凱旋する桃太郎一行を出迎えるお爺さんの手に、日の丸の小旗が握られているのが印象深い。他にも桃太郎の関連教材に修身教科書の『ツヨイコドモ（一）』（1941）があり、『ウタノホン（一）』（1941）に「モモトラウ」の唱歌が、『エノホン（一）』（1941）にも「モモトラウ」が掲載されていた。

国語教育の他にも、学校教育の場で桃太郎の国民童話化を促進したものとして、唱歌を忘れることはできない。1872（明治5）年の学制公布の際に、小学校の教科に「唱歌」が置かれたが、実際に教科書が刊行されたのは、文部省音楽取調掛が編集した『小学唱歌集（初編）』（1881）が最初である。1886（明治19）年の小学校令で教科書検定制度が定められた後は、民間の検定教科書が多く出版されており、1903（明治36）年に教科書の国定化が図られた後も、唱歌だけは主に民間の検定教科書から採択された。しかし、明治末期以降は、唱歌にも

国民思想統一の役割が課せられるようになり、文部省編集のものが、国定ではないが、それに準ずるものとなった（堀内・井上 1958：237-278）。

唱歌に関しては、「モモカラウマレタ、モモタロウ、キハヤサシクテ、チカラモチ」で始まる「モモタロウ」（作詞/田辺友三郎、作曲/納所弁次郎）と、「桃太郎さん桃太郎さん、お腰に付けた黍団子、一つわたしに下さいな」で始まる「桃太郎」（作詞者不詳、作曲/岡野貞一）がよく知られている。前者の初出は、田村虎蔵・納所弁次郎共編『幼年唱歌（初編の上）』（1900）であり、後者は文部省編『尋常小学唱歌』（1911）に収録されている。文部省編集の小学校低学年用の唱歌集では、『尋常小学読本唱歌』（1910）より後に刊行されたすべてに、先の「モモタロウ」もしくは「桃太郎」が掲載されている。特に、「桃太郎」を収めた文部省の『尋常小学唱歌』（1911）は、「国定ではなかったが唯一の官版唱歌曲集であったため、民間版の唱歌集を完全に圧倒し去って、ほとんど全国の小学校で用いられたから事実上国定と同じであった」（堀内・井上 1958：260）と評されるほどの影響力を持った。1941（昭和16）年4月から実施された国民学校令により、すべての教科書が国定化された後に刊行された『ウタノホン（上）』（1941）にも「モモタロウ」が掲載されている。また、学校劇でも桃太郎は人気の題目であり、本土はもちろん、かつての日本植民地等でも演じられた記録が散見されるが、それに関する考察は今後の課題としたい。

桃太郎噺の標準型には、口頭伝承として各地の方言で語り継がれたものも少なくない。国民童話としての桃太郎は、単に話型が標準型であるだけでなく、標準語で記述され、教科書や絵本などのマスメディアに掲載され、学校教育の場で教えられることで形成されたものである。国民童話化された桃太郎は、一種の権威を帯び、数ある桃太郎噺の正本の如く人びとに意識されることにもなった。それは同時に、各地で語り継がれた多様な桃太郎噺を、「正しい物語」からの逸脱や誤りと見なす傾向を助長するものでもあった。1894～95（明治27～28）年の日清戦争以後、日本の義務教育就学率は急速に上昇し、小学校の児童数は1890（明治23）年の約310万（男65.1%、女31.1%）から、1900（明治33）年には約468万（男90.7%、女71.7%）となり、1905（明治38）年には約535万人（男97.7%、女93.3%）に達している（文部省 1972：306-338）ことから、桃太郎噺の国語教科書への採用と国民童話化がもった影響力が窺える。

なお、桃太郎噺に関する先行研究の多くは、現在の日本国内で作成され流通した文献や口頭伝承を対象としていたが、表2.に示したように、桃太郎は戦前の日本の植民地、占領地で用いられた国語（日本語）教科書にも度々採用されている。例えば、現在の台湾でも、日本統治時代に教育を受けた世代の方々から、あるいは子や孫に当たる世代の方々から、桃太郎や浦島太郎の噺や唱歌を伺うことがある。母語とは異なる日本語で、自らのものではない物語を学んだ人びとにとっての桃太郎像は、現在でも、日本や日本人、そして日本統治時代の象徴である場合が少なくない。こうした地域における桃太郎噺の扱われ方や解釈については、稿を改めて考察することにした。

(Web上では非公開とさせていただきます)

(Web上では非公開とさせていただきます)

図2.『ヨミカタ(巻一)』(1941):宝庫を引いて戻る桃太郎一行を、お爺さんとお婆さんが日の丸の小旗を持って出迎えている。

図3.『日本語(巻一)』(1944):ジャワ軍政監部発行の教科書。『ヨミカタ(巻一)』の「桃太郎」とほぼ同じ内容だが、挿絵は2色刷りで、凱旋場面には日の丸の小旗は見られない。

4. 昭和前期における桃太郎絵本——視覚イメージの浸透

桃太郎が国家や国民のメタファーとして利用されるうえで、図像が果たした役割を見逃すことはできない。それについて考察する場合、少なくとも、「標準型」の主要場面の構成および桃太郎と鬼に注目すべきであろう。主要場面については、草双紙の初期の形態である赤本を見ると、構図や各登場人物の装いや所作などはかなりパターン化されており、その多くが現代に受け継がれている⁶。鬼については、巨大な体格で、頭に角を生やし、体色は赤や緑青などで、鋭い爪と牙を持ち、褌や虎皮を纏った姿が、江戸期から現代までほぼ一貫している。このような鬼の図像のステレオタイプの成立は古く、『今昔物語集』(12世紀頃成立)の中で、すでに具体的に記述されているようだ(黒田 1994:32-34)。桃太郎については、大別して、①誕生時の赤ん坊の姿、②怪力を発揮する怪童の姿、③鬼退治のために旅立ちの準備をする姿、④鬼退治へ出発した後の若武者姿、がある。中でも典型的なのは、図2.に代表される、陣羽織を身につけた前髪立ちの若武者姿である。太田(2003)は、江戸期の赤本や絵巻における桃太郎図像の形成を当時の芸能等との関連から考察し、赤本には歌舞伎の荒事などの影響を受けた「奴の桃太郎」像があり、絵巻には「若武者風」や「公達風」の桃太郎が見られることを指摘している。江戸期から明治期にはこれら三タイプの桃太郎が共存しているが、明治期に入ると、教科書を始め主要な絵本や文学作品の挿絵では、若武者風の桃太郎が圧倒的多数を占めている。

若武者姿の桃太郎は、現在に至るまで、教科書や絵本を始め、紙芝居、双六、めんこ、凧、コマ、漫画、映画から、着物や茶碗の類に至るまで、児童文化のあらゆる領域に登場している。中でも、近代において教科書以外のメディアで、桃太郎の標準型と視覚イメージのステレオタイプの普及に最も力があつたのは、昭和期に入り発行数が飛躍的に増加した絵本である。表3.には、昭和元年から敗戦までに刊行された桃太郎絵本を挙げているが、教科書への採用も手伝って人気の題材であったことが窺える。これらの多くが版を重ねており、相当

数が市場に出たものと推定される。特に1939（昭和14）年以降、出版数の増加が目立つ。

1937（昭和12）年7月の日中戦争開戦以降、児童文学は少国民文学と改称され、翌年10月には、内務省図書課から「児童読物改善に関する内務省指示要綱」が出された。その中では「廃止すべき事項」として、児童には小さすぎる活字、実質的な内容を有しない懸賞や誇大な広告、卑俗な挿絵、野卑・陰惨・猟奇的な内容のもの等が挙げられている。特に罰則規定は無かったが、極端に悪質と見なされたものは発禁処分とされたため、業界への影響は大きかった。一方で、芸術的で良質な作品は保護され、紙の割り当てなどの便宜が与えられたため、「復興現象」と呼ばれる一時的な出版状況の活性化が見られ、1942（昭和17）年頃まで続いた。しかし、戦局の悪化に伴い、用紙やインクの不足、人材の徴用などが重なり、

（Web上では非公開とさせていただきます）

図4.『講談社の絵本 桃太郎』（1937）：昭和期の桃太郎を代表する作品で、絵本の確立と普及に大きく貢献した「講談社の絵本」シリーズの1冊。

1944（昭和19）年に入る頃には、印刷所の焼失や輸送難などもあって、出版事業は息の根を止められたに近い状況であった（滑川 1988：90-169）。

1939（昭和14）年5月、文部省は従来の図書推薦事業を改正し、新たに児童図書推薦を開始した。推薦図書になると、ラジオや新聞、地方官庁の文書でも無料で宣伝したため、販売数も伸び、二〇、三〇と版を重ねたものも少なくなかった。1940（昭和15）年1月、第8回推薦図書として、前年に発行された『桃太郎』と『金太郎』（共に、幼年絵本研究會/編、黒崎義介/画）が選ばれている（滑川 1988：114-123）。1940（昭和15）年11月22日の東京朝日新聞（朝刊）は、「大小都市、農山漁村からそれぞれ選んだ小学校三〇校の児童一万四九〇〇余名について調査結果 調査の対象となった図書三九冊（昭和一五年三月までに推薦されたもの）のうち、最も多く読まれているのは絵本『桃太郎』で右の児童数の一五パーセント近くが読んでいた」と報じている。2位は『西住戦車長』、3位は『金太郎』でいずれも一割以上の読者があり、以下『イソップ物語』『続良寛さま』『ノリモノチシキ』などが続いていた。

表3.に挙げた戦前の桃太郎絵本は、公共図書館にはほとんど所蔵されておらず、個人蔵のものが多い。論者が確認できたのは、表3.に「*」を付した作品である。それらの絵本はすべて標準語の言文一致体で書かれ、図6.に挙げたパロディの『進め桃太郎』（1942）を除いた全作品が標準型の嚆矢である。図像に関しては、読者層に合わせて、桃太郎の年齢設定には、幼年から15歳程度まで違いは見られるものの、ほとんどの絵本で、主要場面は引き写したかのように同じ構図で描かれており、桃太郎や鬼などの主要キャラクターの装いやポーズも共通している。図3.のように、時代風俗を盛り込むなどの工夫が見られる作品は、むしろ少数

表3. 桃太郎絵本(昭和元~20年8月)(*本表の作成に当たっては、論者による資料調査の他、鳥越(2004)、滑川(1981)を参照した。)

発行年	著者、画家	書名	発行所
1928(昭和3)年4月	的場朝二/編	『モモタラウ』(絵本オトギブック)	鈴木仁成堂
1928(昭和3)年12月	日本コドモ画本研究會/編、鈴木寿雄/絵	『エノオトギ 桃太郎』(エノオトギ1)	金井信生堂
* 1929(昭和4)年11月1日		『桃太郎ト金太郎』(『桃太郎』と『金太郎』「兎と亀」の3話掲載)	榎本法令館
1930(昭和5)年1月	黒崎義介/画	『カクナオトギ モモタラウ』(日本一のエバナシ読本)	文教書院
* 1931(昭和6)年8月10日	富永龍之助/画・作	『桃太郎』	興文堂書店
* 1931(昭和6)年10月25日	石川兼次郎/作・画	『漫画エホン 桃太郎の世界漫遊』(漫画エホン)	富士屋書店
* 1933(昭和8)年1月15日	湯浅策/画・作	『モモタラウ』(コドモノスキナオトギのエホン)	春江堂
* 1933(昭和8)年3月5日	川島はるよ/画	『モモタラウ』	金井信生堂
1928~1932(昭和3~7)年	布目敏行/画	『豆仮名絵本 桃太郎』(豆仮名絵本第2編)	青欄社
* 1933(昭和8)年11月20日	石川兼次郎/画・作	『コドモエバナシ 桃太郎』	富士屋書店
1935(昭和10)年	山崎敬三	『モモタラウ』	パンザイエホン
1935(昭和10)年12月	鈴木としを	『桃太郎』(日本オトギエバナシ)	金井信生堂
1936(昭和11)年6月	湯浅策/画	『桃太郎と舌切雀』(『桃太郎』「舌切雀」の2話掲載)	春江堂
* 1936(昭和11)年12月5日	鈴木としを/案・画	『日本童話絵本 日本オトギエバナシ』	金井信生堂
* 1936(昭和11)年12月15日		『モモタローサン』(ユウギス オトギブック)	秀峰社
1936(昭和11)年12月	山田伝七	『モモタローサン』	金羊堂
* 1937(昭和12)年1月1日	松村武雄/文、斎藤五百枝/絵	『桃太郎』(講談社の絵本)	大日本雄弁会講談社
* 1937(昭和12)年2月1日	吉田忠夫/作・画	『モモタラウ』(幼年ブック)	伊林書店
1937(昭和12)年2月		『モモタロウ』	伊林書店
1937(昭和12)年3月		『モモタローサン』	金羊堂
* 1937(昭和12)年7月15日	宮地志行/画	『桃太郎』(優良コドモエホン)	泰光堂
* 1937(昭和12)年7月25日	鈴木吉平/作・画	『桃太郎』(モハンエホン)	鈴木吉平
1937(昭和12)年7月	宮地志行/画	『桃太郎』	金井信生堂
* 1937(昭和12)年10月15日	幼年絵本研究會/編、鈴木寿雄/画	『桃太郎』	富士屋書店
* 1937(昭和12)年11月5日	飯澤天羊/画	『桃太郎』(オトギエホン)	東光堂
* 1937(昭和12)年11月5日	丸山俊郎/文・画	『桃太郎』(キンダーエホン)	東光堂
* 1938(昭和13)年6月5日	与田準一/文、野田助俊/画	『桃太郎』(ニッポンエホン)	金井信生堂
* 1938(昭和13)年6月20日	林義雄/画	『桃太郎』(『桃太郎』「舌切雀」の2話を掲載)	愛児の絵本刊行会
1938(昭和13)年6月		『桃太郎』	春江堂
* 1938(昭和13)年7月15日	芳賀傳/画	『桃太郎』(オトギ噺絵本)	中村書店
* 1938(昭和13)年7月15日	林義雄/画	『桃太郎』	春江堂
* 1938(昭和13)年6月20日		『コドモの大好きな オトギエバナシ』(『桃太郎』「舌切雀」の2話を掲載)	愛児の絵本刊行会
* 1938(昭和13)年9月5日		『桃太郎』(オモシロイ オトギエホン) (『桃太郎』「カチカチ山」「牛若丸」の3話を掲載)	富士屋書店
1939(昭和14)年1月	金井繁	『モモタラウ』	日吉堂本店
* 1939(昭和14)年2月15日	横戸青果/画	『モモタラウ』	富士屋書店
* 1939(昭和14)年3月1日	幼年絵本研究會/編、藤田幸也/画	『桃太郎』(標準絵本)	富士屋書店
* 1939(昭和14)年5月10日	山路露三/画	『ムカシハナシ モモタラウ』	春江堂
* 1939(昭和14)年5月10日	中井親邦/絵	無題	富士屋書店
* 1939(昭和14)年5月30日	中井親邦/画	『桃太郎』(ヒノマルエホン)	富士屋書店
1939(昭和14)年7月	石川廉太郎/文、鈴木寿雄/絵	『モモタラウ』	富士屋書店
* 1939(昭和14)年8月10日	藤田幸也/画	『モモタラウ』(家庭絵本)	富士屋書店
* 1939(昭和14)年7月20日	幼年絵本研究會/編、鈴木寿雄/画	『モモタラウ』(幼稚園絵本)	富士屋書店
* 1939(昭和14)年10月28日	幼年絵本研究會/編、黒崎義介/画	『桃太郎』(児童絵本)	富士屋書店
1939(昭和14)年	富永龍之助	『モモタラウ』	ヒノテブック
1940(昭和15)年1月	布施長春/画	『桃太郎』	富士屋書店
1940(昭和15)年3月30日	宮地志行/画	『桃太郎』(優良コドモエホン)	金井信生堂
* 1940(昭和15)年4月5日	幼年絵本研究會/編、布施長春/画	『桃太郎ト牛若丸』(幼児絵本) (『桃太郎』と「牛若丸」の2話掲載)	富士屋書店
* 1940(昭和15)年4月25日	新井五郎/絵	『モモタラウ』	春江堂
* 1940(昭和15)年6月18日	鈴木としを・渡辺太刀雄/画	『モモタロウと兎とカメ』(『モモタロウ』と「兎とカメ」の2話掲載)	大川屋書店
* 1940(昭和15)年7月25日	渡辺哲夫/著、黒崎義介/絵	『桃太郎』	富士屋書店
* 1940(昭和15)年8月5日	清水茂三/文、河島赤陽/画	『桃太郎』(コドモエホン)	大日本愛国絵本会
* 1940(昭和15)年8月5日	石川兼次郎/編、藤田幸也/画	『桃太郎』(愛児絵本)	富士屋書店
* 1940(昭和15)年9月10日	湯浅修一/編、林義雄/画	『桃太郎』	湯浅策
* 1940(昭和15)年10月25日	大谷秀親/画・文	『モモタラウ』	泰光堂
* 1940(昭和15)年11月25日	横戸浩/画	『桃太郎』(東京絵本)	二葉書房
* 1941(昭和16)年5月10日	二葉書房編集部/編、大槻定雄/画	『桃太郎』(新知育絵本)	二葉書房
* 1941(昭和16)年5月25日	二葉書房編集部/編、武田端史/画	『桃太郎』	二葉書房
1941(昭和16)年5月	小林和郎	『桃太郎』	三光社
1941(昭和16)年5月	西崎大三郎/文、吉沢廉三郎/絵、川島はるよ/絵、福興英夫/絵	『三ッノオハナシ』(『キンダーブック』第一四集第二編)	フレーベル館
* 1941(昭和16)年10月20日	山田年男/文、中田春翠/画	『モモタラウ』	国華堂、日童社
1942(昭和17)年2月	藤田健一/編、近藤健児/絵	『桃太郎』	児訓社
* 1942(昭和17)年3月15日	武内てるよ/文、豊国年亮/画	『桃太郎』	不二出版社
* 1942(昭和17)年4月15日	須沢琢郎/作、和田美夫/画	『進め桃太郎』(教育ヌリエ紙芝居)	日本絵雑誌社
* 1942(昭和17)年5月15日	奈街三郎/文、藤沢龍雄/絵	『桃太郎』	二葉書房
* 1942(昭和17)年10月29日	後藤植根/文、古藤幸年/画	『モモタラウサン』	教養社
1942(昭和17)年10月	山田年男	『モモタロウ』	国華堂日童社
1942(昭和17)年10月	杉山雄一郎	『モモタロウサン』	教養社
* 1942(昭和17)年12月30日	吉田一穂/編、鈴木寿雄/画	『モモタラウ』	金井信生堂
* 1943(昭和18)年5月5日	柴野民三/文、新井五郎/画	『桃太郎』	春江堂
* 1943(昭和18)年5月20日	浜田広介/文、田中針水/画	『モモタラウ』	フタバ書院成光館
* 1943(昭和18)年12月20日	吉田一穂/編、鈴木寿雄/絵	『モモタラウ』	金井信生堂
* 1944(昭和19)年1月1日	千葉省三ほか/文、斎藤五百枝/画	『ムカシハナシ モモタラウ』(コドモエバナシ)	大日本雄弁会講談社
* 1944(昭和19)年2月20日	都築益世/文、東島光/画	『ムカシハナシ モモタロウ』	高和堂書店

である。山田は、オリジナリティをめぐる議論の中で、江戸期の浮世絵の美人画を例に挙げ、表現の似通った絵が同時代に流通した背景の一つに、美人の表現が絵師に属するものでなく、広く浮世絵界に共有されるものという発想があったことを指摘している（山田 2002：54-56）。同様に、桃太郎噺の標準型やステレオタイプの図像が広く定着してきた根底には、オリジナリティという概念に縛られることなく、自由に模倣されてきたという事実を指摘しておきたい。

（Web上では非公開とさせていただきます）

（Web上では非公開とさせていただきます）

図5. 『モモトラウと兎とカメ』(1940)：桃太郎を育てる場面にも時代風俗が取り入れられている（小川護氏蔵）。

図6. 『進め桃太郎』(1942)：桃太郎のパロディで、戦いの場面には戦車や飛行機など近代の武器が登場する（小川護氏蔵）。

5. 「理想の子ども」としての桃太郎像とその変容

桃太郎の国民童話化に伴う重要な話題が、それをめぐる解釈の問題である。桃太郎噺は、鬼、鬼が島、宝を始め、伝統的な象徴を多く含んでおり、本来、その多くは多義的なものである。例えば、鬼は人間に危害を加える邪悪な霊や死者のイメージを持つ一方で、人びとに祝福をもたらす存在でもある。ただ、これらの象徴は、標準型の噺の中では、「桃太郎と鬼＝英雄と敵」、「郷土と鬼が島＝内と外」といった構図に埋め込まれることで、一定の解釈を保っている。

しかし、標準型の桃太郎噺が、如何にして日常の教訓的価値と結びつけられ、ひいては天皇を頂点とする近代日本の国家体制の政治イデオロギーに組み込まれていったのか。昔話の教訓化は明治大正期の児童教育で論じられることが多かったが、船戸は、幕府の教化政策の下、すでに幕末には桃太郎が親孝行や勤勉などの徳目の体現者として描かれていたことを指摘している（船戸 1998：22-25）。物語の最後で天皇に宝を献上する場面も、黄表紙『桃太郎一代記』（北尾政美/画、1781）などに登場する。このように、明治期における桃太郎の理想化と教訓的解釈は、近世との断絶の上にあるのではない。ただ、明治期の教訓的解釈を考えるうえでは、1890（明治23）年10月、国民道徳の基本と教育の根本理念を示す目的で発布された「教育ニ関スル勅語」との関係抜きにすることはできない。

「教育勅語」の本文は315字と短く、内容的には三つの部分から構成される。まず、肇国以来、歴代天皇が道德の育成に努め、臣民も忠義や道德において心を一にしてきたことを国体の精華とし、教育の根源がここにあるとする。次いで、「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ」、「学ヲ修メ業ヲ習ヒ」、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天譴無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」など、臣民の体得すべき徳目を列挙する。終盤では、最後にこうした国体観、臣民観が「皇祖皇宗の遺訓」であるとして、その遵守が説かれる（家永 1984）。

桃太郎を「教育勅語」と関連づけて解釈した例は多いが、本として出版されたものでは、山本放卷（正義）『文武忠孝 教育桃太郎冊紙』（1890）、樋口勘次郎『修身童話第一編 桃太郎』（1898）、大石末吉の『教育勅語 桃太郎訓話』（1934）がある。例えば、国語国字運動の推進者でもあった樋口の『修身童話第一編 桃太郎』は、小学校での教育経験を踏まえて、小学一年生向けの修身教材として書かれたもので、言文一致体と漢字を廃した表音仮名遣いが試みられており、上田万年らが校閲に当たっている。冒頭で、桃太郎の話の主旨を「談笑の間に、義勇奉公の精神を養ひ、冒険遠征の思想を鼓舞し、父母養育の洪恩を知らしめ、兼ねて、立身巧妙の大孝たる所以を感得せしむる」こととしている。内容面では、桃太郎が学校で先生から鬼が悪事を働くので天子様が心配されていると聞き、天子様に忠義を尽くすために鬼征伐に向かう点が特徴的である。本文の上欄には指導者用の注記が記載されており、「夫婦相和」「忠義」「孝行」などの教育勅語の徳目を中心として、算数や理科の知識への関連づけも盛り込まれている。

一方で、教育勅語に基づく解釈とは異なる形で、「理想の子ども」としての桃太郎論を展開した例も見られる。その代表例が、巖谷小波が『桃太郎主義の教育』（1915）で、新しい時代の国民教育の理念として唱えた「桃太郎主義」⁷である。その冒頭で、小波は「富士が日本一として、理想的の山容を備へて居る如く、桃太郎も亦日本一として、理想のお伽噺」（1915：2）であるとしたうえで、桃太郎は「その初から終まで、積極的に進取的に、放胆的に、而も亦楽天的である」（1915：31）と評価している。そして、桃太郎には「かちかち山」の残酷さや「花咲翁」の姑息な教訓もなく、桃から子が生まれたこと、桃太郎が鬼が島征伐を思い立ったこと、犬・猿・雉が家来になったことなど、すべてに無邪気と無造作が生きていると説く。その上で、桃太郎に象徴される、腕白、無邪気、大胆、慈悲、公平などの徳目を備えた人間に、子どもを育てることを主張している⁸。当時の小波の影響力を考えると、彼の唱えた「桃太郎主義」は、先に触れた学校教科書の桃太郎解釈の変化にも、一定の影響を与えたと考えられる。

加えて、「理想の子ども」としての桃太郎を、現実の子どもとして提示したものとして、朝日新聞社主催の「健康優良児表彰事業」がある。「桃太郎さがし」の名で呼ばれたこの事業は、文部省の後援の下に1930（昭和5）年に開始され、台湾、朝鮮、樺太を含む全国の小学六年生を対象として日本一の健康優良児を選抜し表彰したもので、1943（昭和18）年から48（昭

和23)年までの中断を経て、1978(昭和53)年まで継続された。審査は、各小学校の学校審査により各校男女各1名を選抜し、各地方長官を会長とする地方審査会での予選を経て、最終的には文部省普通学務局長を委員長とする中央審査会で、男女各1名の「日本一健康児童」を選考するという形で進められた。選考は主に調査カードを基にして行われたが、そこには身体状況や運動能力に関する項目の他に、病欠日数、学業、操行、さらには本人の既往歴や家族構成、生活状況に関する項目までもがあった(朝日新聞社 1930;朝日新聞社百年史編集委員会 1991:347)。これらの項目中、第一回の表彰事業では「審査上もつとも重要な役割を演ずべき要素としては、身体状況と運動能力の二つ」とされていたが、中央審査会での審査段階では判定が非常に困難となり、最終的には学業、操行や容姿の印象までもが審査対象となった。そして、日本一だけでなく、準日本一や府県一も、ほとんどが身体状況、運動能力のみならず、学業、操行も優秀な児童が選ばれた(石岡 2004:67-72)。

「桃太郎さがし」は、当時の健康国策に適った事業でもあり、地方審査の段階から新聞が繰り返し報道し、全国的な関心と呼んだメディア・イベントとなった。第一回開催の報道を大阪朝日新聞岡山版を例として見ると、地方審査の段階から「集まった桃太郎と桃子 全県下から百九名」(1930年3月19日朝刊)、「吉備団子のお膝元から 日本一の健康優良児 その候補者に選ばれた本県代表の成績はこの通り」(同年4月16日朝刊、代表児童2名の写真付き)などと、大きく報じられている。第一回の表彰式は、1930(昭和5)年5月5日の端午の節句の日に、東京朝日新聞本社講堂で行われ、児童には北村西望作の桃太郎のメダルが贈られた。表彰式の後も、秩父宮夫妻や東九瀬宮に拝謁し、当時日本海軍の元老であった東郷平八郎から訓辞を受けている。古賀は、こうした過程を詳しく紹介しながら、この健康優良児表彰制度が、一新聞社の事業ではなく、国家的なイベントとして社会に認知されていったことを指摘している(古賀 2004:23-65)。また、「桃太郎さがし」は、学校選抜の過程から、口コミを通して地域の人びとの関心を集めたに違いない。

昭和期に入ると、桃太郎の鬼退治を戦争の、桃太郎を皇軍兵士のメタファーとして使用することが定着してゆく。例えば、大石末吉の『教育勅語 桃太郎訓話』(1934)は、冒頭に、東京の各種講演会で話した内容の概要を、思想統一のため全国小学校を講演行脚する意を固めて文章に綴り、ラジオ放送・蓄音機吹込版として縮刷改稿したものがある。桃太郎に現れた教育勅語の精神を明らかにしようとする点では樋口と同様だが、終盤では、鬼征伐を欧州戦争や満州事変に例え、桃太郎を参謀本部総指揮官、犬・猿・雉を兵隊に例えたりするなど、軍国主義的色合いがより強い。そして、日清、日露戦争での日本の勝利を教育勅語の精神の成果であるとし、桃太郎は「教育勅語の実践躬行者」で「日本魂の権化と謂ふべき」としている。また、徳富蘇峰(当時、貴族院議員)は、1939(昭和14)年2月5日、国民精神総動員中央連盟主催の下、日比谷公会堂で行われた日本精神発揚大講演会において、「日本精神の扶植と東亜興隆」と題する講演を行い、西洋文明は自由主義、社会主義、功利主義、共

産主義などの「鬼児」を産んできたとし、それらを打倒する必要性を説いたうえで、「鬼ヶ島を退治するにも、尚ほ桃太郎を要するではありませんか。我が皇軍は宜しく此考を以てやるべきである」（徳富 1939：19）と述べている。新聞記事にも、太平洋戦争における日本の南洋進出を桃太郎噺に例えて報じた例が散見される。例えば、1942（昭和17）年3月28日の報知新聞（朝刊）には、「南海の鬼ヶ島征伐 テビンチンギ島の殊勲」、「桃太郎には海の勇士 積んだ宝は鶏卵やら砂糖 ふん捕り船でエンヤラヤ」といった見出しの記事があり、同年7月3日の読売新聞（朝刊）は、「陸戦隊を驚かす日本語の歓迎 “新版鬼ヶ島征伐” 従軍」と題して、インドネシアのナツナ群島で、日本軍の上陸が現地の人びとから歓迎を受けたことを報じている⁹。

6. おわりに

桃太郎噺の最大の特徴は、近代以降、時代のイデオロギーに応じて、様々に読み替えられてきたことである。それを可能にした前提が、国民童話としての桃太郎噺——標準型の噺、標準語での記述、凶像のステレオタイプ——の共有であった。標準型の根幹をなす桃太郎パラダイムは、太平洋戦争時に軍国主義の宣伝に利用されたのみならず、様々な政治的イデオロギーと結びつけられてきた。1967（昭和42）年に日本を訪れた蔣経国が、中国共産党との貿易を批判する中で桃太郎の話を挙げ、桃太郎精神に倣って鬼である共匪と戦うべきだと述べたという話（武久 2010）は、その端的な一例であろう。一方で、芥川龍之介の「桃太郎」（1924）や、プロレタリア児童文学の桃太郎に題材をとった諸作品¹⁰のように、桃太郎パラダイムを支える「理想の子ども」としての桃太郎像の転換を図り、桃太郎を悪者や臆病者として描いた例が、戦前にすでに出されている。

敵国を鬼とし桃太郎を皇軍の兵士に見立てる解釈は、日清戦争の頃には見られる。例えば、巖谷小波の『桃太郎』（1894）では、桃太郎は鬼が島に攻め入る際に、「天つ神の御使、大日本の桃太郎將軍、征伐の為に^{あま}出向ひ賜ふ」（巖谷 1894：36）と名乗りを上げている。日露戦争勃発の年に出された『征露再生桃太郎』（1904）では、お爺さんは「エイゾー」、お婆さんは「オアメ」という名で、イギリスとアメリカの国旗柄の服を着た西洋人である。桃太郎は、「おシナさん」と「おチョーちゃん」をいじめる悪者の「ロスケ」を懲らしめるため、黍団子の代りに大砲の玉を携えてロシアに遠征し、満州鉄道などの宝を以て凱旋するという筋書きである。こうした読み替えは、文献だけに止まらない。例えば、1898（明治31）年、東京で開催された明治維新30周年の大祭典では、落語家の一団が、日清戦争における日本側の勝利に見立てて桃太郎の鬼退治を上演している（Fujitani 1998：35）。また、日清、日露戦争の終結時には、岡山名物の吉備団子の老舗、廣栄堂の初代・武田浅次郎が、大陸から広島県宇品の軍港を経て山陽鉄道で故郷へと凱旋する兵士たちに向けて、「鬼が島を征伐した、桃太郎の皆様が、国への土産は吉備団子」と呼びかけて、大いに人気を博した（加原 2004）。

太平洋戦争に際しては、こうした読み替えが急速に増加を見せると共に、海軍省の後援を受けて制作された「桃太郎の海鷲」(1943年封切り)、「桃太郎 海の神兵」(1945年封切り)¹¹に代表されるように、軍部主導の戦争プロパガンダに利用されたことは特筆すべきであろう。それらを逐一紹介することはできないが、最後に、論者の心に深く残った一枚のポスター(図11.)を挙げておきたい。これは、日本桃太郎会の会長を務めた故・小久保桃江氏が、戦前戦後の困難な時代状況の中で守り通した資料の一つである。「ポスターの構想ニ就テ」と題した一枚の文書¹²は、「我肇国ノ大精神ヲ基根トシ雄大ナル大東亜大義戦地域ヲ一枚ノ絵画トシテ大人、子供ノ何レニモ判り易クスル為」に宝船や七福神、桃太郎などを用いて作成したとする主旨から始まり、総大将の桃太郎と七福神を合わせた八人と、帆や船体に描かれた七つの主要な島々と日本を合わせた八つの島とが、八紘一宇の理想を表すとする。そして、一億火の玉となって老いも若きも労働する様子を、お祖父さんお祖母さんと撫子で表現するとしている。ここに見られるように、国民童話となった桃太郎は、時代の政治イデオロギーと大衆的な認識の枠組みをつなぎ合わせる上で、物語の解釈においても、視覚イメージにおいても、最適な素材であったのである。

(Web上では非公開とさせていただきます)

(Web上では非公開とさせていただきます)

図7. 『日本再生桃太郎』(1905): 『征露再生桃太郎』から改題して、翌年、富里書店から発行されたもの。

図8. 「大正桃太郎絵葉書」(大正期): 葉書の包みには、日本の海外発展、南進政策を国民に鼓吹する目的で発行したとする趣旨が記されている。

(Web上では非公開とさせていただきます)

(Web上では非公開とさせていただきます)

図9. 「桃太郎の海鷲 (映画チラシ)」(1943年封切り)：真珠湾攻撃の成功を宣伝するため、海軍省の発注で瀬尾光世の芸術映画社が制作した日本初の長編アニメ映画 (37分)。

図10. 「桃太郎 (音楽劇チラシ)」(1943年3月上演)：東宝劇場、東宝映画、榎本健一座の共同企画で、言論統制が強まる中で上演された。桃太郎役は高峰秀子、猿役は榎本健一。

(Web上では非公開とさせていただきます)

図11. 「大東亜戦争第2周年記念ポスター」(1943)：中部軍報道部が作成したもので、当時の日本を取り巻く政治情勢が凝縮されている (小川護氏蔵)。

【注記】

所蔵者の記載が無い図版は論者の所蔵品である。また、参考資料として用いた国語教科書や絵本類は非常に多数に及ぶため、表1.、表3.にそれぞれまとめて記載した。

【謝辞】

本稿に関連する資料調査において、特に戦前の桃太郎絵本については、日本桃太郎会の会長を務めた故・小久保桃江氏やその御親戚の方々に大変お世話になりました。また、メトロポリタン東洋美術研究センター東洋美術研究助成費 (2005年度、個人研究、「folk artに見られる『桃太郎』像に関する諸資料の記録と分析」) を頂いたことに感謝します。

【注】

- 1 蘆谷蘆村は、『国定教科書に現はれたる国民説話の研究』（1936）で「国民説話」の語を用いている。「説話」が口頭伝承も含むのに対し、大正期に普及した「童話」は書かれた文学作品を指す場合が一般的であるため、ここでは国民童話を用いた。
- 2 江戸期は回春型で明治期以降は果生型へ移行したとする例が多く見られるが、江戸や上方の都市部で刊行された草双紙類が、当時の日本全体の状況を反映しているとは言えない。
- 3 教材への採用に際して物語から性的要素が排除された例としては、浦島太郎で浦島と竜宮の姫との結婚の部分が除かれたことが指摘されている（三浦 1989）。
- 4 同紙の読者欄「角笛」には、「桃太郎と猿蟹」（1929年2月6日朝刊）、「アンチ『桃太郎』」（同年2月8日朝刊）という題で、読者から賛否両論が寄せられている。
- 5 当時の教科書編纂に関する状況については井上（1951）に詳しい。
- 6 誕生場面は、草双紙類には果生型が多い。また、窪田（2001）は、江戸期に見られた桃太郎による鬼の根城の「門破り」の場面が、明治期には桃太郎が猿に命じて門を開けさせる形に変化することを指摘している。
- 7 巖谷と親交の深かった久留島武彦と岸辺福雄も、それぞれ異なる意味で、自らの教育論に「桃太郎主義」を用いた。詳細は内山（1972：31-32）を参照。また、戦前から一貫して、社会福祉の観点から桃太郎噺の意義を主張した人物として、大日本桃太郎少年団の初代団長や日本桃太郎会の会長を務めた小久保桃江がいる。
- 8 神島二郎は、小波の桃太郎主義を、民主主義的、平和主義的な時には、幼稚主義的偏向に陥りやすく、大勢が民族主義、国家主義に転ずると、侵略主義に赴きやすいと批判している（神島 1961：202）。
- 9 桃太郎の鬼退治を日本の南進に、鬼の宝を南洋の物産とする見方は、台湾領有から十数年後に行われた新渡戸稲造の講演（新渡戸 1970：186-196）にも見られる。
- 10 プロレタリア児童文学における桃太郎のパロディ作品に関しては、鳥越（2004：79-114）に詳しい。
- 11 「桃太郎の海鷲」はハワイの真珠湾攻撃を、「桃太郎 海の神兵」はインドネシアのセレベス島メナド飛行場への落下傘部隊の降下作戦を題材にした長編プロバガンダ映画。この他に、桃太郎を題材にした戦前の映画には、横浜シネマ商会が制作した短編『空の桃太郎』（1931）、『海の桃太郎』（1932）がある。
- 12 小久保桃江氏から提供を受けた資料で、ポスターと共に配布されたようだが、著者、発行者、発行年などは不明である。

【引用・参考文献】

- 芥川龍之介「桃太郎」、『サンデー毎日』夏期特別号、大阪：大阪毎日新聞社、大正13年(1924)、38-39頁。
- 朝日新聞社『全日本より選ばれたる健康児三百名』東京：東京朝日新聞社、昭和5年(1930)。
- 朝日新聞社百年史編集委員会『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』、平成3年(1991)。
- 家永三郎「教育勅語」国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第4巻、東京：吉川弘文館、昭和59年(1984)、260-262頁。
- 石岡学「理想の子どもとしての健康優良児—新聞報道における健康優良児のイメージ」、『教育社会学研究』第75集、平成16年(2004)、65-84頁。
- 井田秀明『「桃太郎」『猿蟹合戦』問題』、『童話研究』第8巻5号、昭和4年(1929)、47-50頁。
- 井上赳「国語教育の回顧と展望(2)」、国語教育講座編集委員会編『国語教育問題史』東京：刀江書院、昭和26年(1951)、39-74頁。(国語教育講座11)
- 巖谷季雄(小波)『日本昔噺第一編 桃太郎』、東京：博文館、明治27年(1894)。
- 『桃太郎主義の教育』東京：東亜堂書房、大正4年(1915)。
- 内山憲尚『日本口演童話史』東京：文化書房博文社、昭和47年(1972)。
- 大石末吉『教育勅語 桃太郎訓話』東京：創文社、昭和9年(1934)。
- 太田昌子「江戸の桃太郎イメージ」、大隅和雄編『文化史の構想』東京：吉川弘文館、平成15年(2003)、322-351頁。
- 海後宗臣編『日本教科書大系』4～9巻、東京：講談社、昭和36年(1961)。
- 鹿野政直『桃太郎さがし—健康観の近代』東京：朝日新聞社、平成7年(1995)。(朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす23)
- 加原奈穂子「旅みやげの発展と地域文化の創造」、『旅の文化研究所研究報告』第13号、東京：旅の文化研究所、平成16年(2004)、37-56頁。
- 神島二郎『近代日本の精神構造』東京：岩波書店、昭和36年(1961)。
- 唐澤富太郎『児童教育史—児童の生活と教育』東京：ぎょうせい、平成4年(1992)。(唐澤富太郎著作集 第1巻)
- 木下米松「桃太郎を如何に取扱ふべきか」、国語研究会編『国語教育』第3巻第9号、大正7年(1918)、126-130頁。
- 窪田美鈴「昔噺絵本—『桃太郎』絵本における視覚表現の変遷」、鳥越信編『日本の絵本史 I』京都：ミネルヴァ書房、平成13年(2001)、207-223頁。
- 黒田日出男「異界の子ども近世の子ども—浦島太郎・金太郎・桃太郎」、江戸子ども文化研究会編『浮世絵のなかの子どもたち』東京：くもん出版、平成5年(1993)、216-222頁。
- 「絵巻のなかの鬼—吉備大臣と<鬼>」、大隅和雄編『大仏と鬼』東京：朝日新聞社、平成6年

- (1994)、32-43頁。(朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読み直す5)
- 古賀篤「第一部 健康優良児表彰事業の歴史」、高井昌史・古賀篤『健康優良児とその時代』東京：青弓社、平成20年(2008)、21-65頁。
- 国語教育学会編『小学国語読本総合研究』巻9(第5冊)、東京：岩波書店、昭和13年(1938)。
- 国語研究会編『国語教育』第3巻第9号、東京：育英書院、大正7年(1918)。
- 島津久基『日本国民童話十二講』東京：山一書房、昭和19年(1944)。
- 武久康高「台湾における桃太郎」、『アジア遊学』第108号、東京：勉誠出版、平成20年(2008)、134-141頁。
- 徳富猪一郎「日本精神の扶植と東亜興隆」、国民精神総動員中央連盟編『日本精神発揚講演集』東京：国民精神総動員中央連盟、昭和14年(1939)、14-30頁。
- 鳥越信『桃太郎の運命』京都：ミネルヴァ書房、平成16年(2004)(鳥越信『桃太郎の運命』東京：日本放送出版協会、昭和58年(1983)の増補改訂版)。
- 滑川道夫『桃太郎像の変容』東京：東京書籍、昭和56年(1981)。
- 『日本児童文学の軌跡』東京：理論社、昭和63年(1988)。
- 西川長夫「序 日本型国民国家の形成—比較史的観点から」、西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期の国民国家形成と文化受容』東京：新曜社、平成7年(1995)、1-42頁。
- 新渡戸稲造「桃太郎の昔噺」、新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集』第5巻、東京：教文館、昭和45年(1970)、186-196頁。
- 樋口勘次郎編『修身童話第一編 桃太郎』東京：開発社、明治31年(1898)。
- 船戸美智子「草双紙にみる桃太郎の教訓化」、『雅俗』第5号、福岡：雅俗の会、平成10年(1998)、22-25頁。
- 堀内敬三・井上武士「解説」、堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』東京：岩波書店、昭和33年(1958)、237-278頁。
- 丸山修一郎「桃太郎を如何に取扱ふべきか」、国語研究会編『国語教育』第3巻第9号、大正7年(1918)、130-135頁。
- 三浦裕之『浦島太郎の文学史—恋愛小説の発生』東京：五柳書院、平成元年(1989)。
- 宮脇弘幸ほか『日本植民地・占領地の教科書に関する総合的比較研究—国定教科書との異同の観点を中心に』及び『別冊 日本植民地・占領地・国定教科書目次目録』(平成18年度～平成20年度科学研究費補助金研究成果報告書)、平成21年(2009)。
- 文部省編『学制百年史(記述編)』東京：帝国地方行政学会、昭和47年(1972)。
- 安田敏朗『帝国日本の言語編制』横浜：世織書房、平成9年(1997)。
- 山田奨治『日本文化の模倣と創造—オリジナリティとは何か』、東京：角川書店、平成14年(2002)。
- 山本正秀『近代文体発生の史的研究』東京：岩波書店、昭和40年(1965)。
- 山本有三「小学読本と童話読本」、土屋文明・高橋健二編『山本有三全集』第10巻、東京：新潮社、

昭和52年（1977）、288-293頁。

Dower, John W. “War without Mercy: Race & Power in the Pacific War.” New York: Pantheon Books, 1986. (『容赦なき戦争』猿谷要監修・斎藤元一訳、東京：平凡社、平成13年（2001）)

Fujitani, Takashi. “Splendid Monarchy: Power and Pageantry in Modern Japan.” Berkley and Los Angeles: University of California Press, 1998.

From Folktale Hero to National Symbol: The Making of Momotarō Paradigm in Japanese Modern Age

KAHARA Nahoko

This study concerns the question of how one of the most famous Japanese folktale heroes, *Momotarō*, the ‘peach boy’, has become a dominant metaphor for the self of the Japanese people in modern Japan. It has repeatedly been involved when the Japanese situate themselves in their interaction with the rest of the world.

The story of Momotarō has been handed down both orally and in written form, and it varies considerably. What is generally known all over Japan is the “*Hyōjun-gata*”, the standard type, in which the main character Momotarō, accompanied by a dog, a monkey, and a pheasant, sail across the sea to conquer some ogres and returns with the ogres’ treasure. This standard type had been included with illustrations in the basic textbooks for elementary language instruction from 1887 to the end of the World War II.

The Momotarō story has changed its interpretation according to the ideology of each historical period. During the military era through 1930’s to 1945, the Momotarō story was frequently used for nationalistic purposes to establish Japan’s national identity and promote patriotism among the people. In wartime picture books, cartoons, songs, dramas and animated films, Momotarō often appeared as a youthful and strong embodiment of the “new” Japan and a Japanese soldier. It is in sharp contrast to Anglo-American enemy, who were presented as aging and feeble demons with a human face. An American historian John W. Dower analyses the features of the cultural cognitive framework appeared in Japanese war propaganda and calls it the “Momotarō paradigm.” However, how and why the Momotarō story come to be used in such a context? Under which circumstances did this happen?

This symbolic meaning of Momotarō as an exemplary model for young Japanese had been constructed in the modern era by being linked to the national morality and political ideology. Its inventive process is rather complicated. By examining mainly school textbooks, picture books for children and the representative texts of its educational interpretation, I shall focus on its three important backgrounds: The transformation of the Momotarō story into a national literature, the permeation of its stereotype visual image, and the idealization of Momotarō as a perfect symbol for young Japanese.